

# アダム・スミスの歴史観

— 文明の発展、停滞、衰退の論理 —

## Adam Smith's View on History

— The logic of progress, stagnation, and decline —

田 中 秀 夫

The historical view of Adam Smith, described in *Wealth of Nations*, and lectured on the Jurisprudence class at Glasgow, was composed of comprehensive arguments including not only economic history and history of government and constitution, but also history of civilization. He used such plural concepts and ideas as barbarism and civilization, classic or ancient and modern, and four-stage theory distinguishing hunters, shepherds, husbandmen, and merchants in order to explain historical changes in many societies. He found two cycles of history. Ancient Greece and Rome succeeded by feudal and modern, in which civilization was becoming the most advanced state. He was skeptical about future development because of the defects of human nature.

Hideo Tanaka

JEL : B120

キーワード：アダム・スミス、未開と文明、4段階説、発展・停滞・衰退、分業展開史観

Keywords : Adam Smith, barbarism and civilization, developing・stagnant・declining, historical view of division of labor, development

### 1 はじめに

現代の地球社会は、経済においても、文化や科学技術においても、ますます発展している反面で、複雑化が進むとともに危機もまたいつそう深まっているように思われる。経済発展と富裕化が世界全体に広まりつつあり、世界の各地の情報が立ちどころに伝えられる情報化とグローバル化も著しいけれども、深刻な問題も多数抱えている。世界の各地で様々な軋轢、民族や部族紛争、領土問題、貿易摩擦もあれば権力闘争などが続いており、増加する人口は常に一

定の飢餓線上の人口の滞留を生み出している。また危機的とまでは言えないにしても、アラブ世界や世界の各地でハンチントンの言う「文明の衝突」<sup>1)</sup> が起こっているかに見える。いずれにせよ予断や楽観を許さない不安定な状況のなかにあることは確かである。

21 世紀に入ってすでに 10 年以上が過ぎたが、世界は期待されたような安定と平和に必ずしも向かっていない。テロもあれば、テロとの戦いもある。世界を巻き込んだ金融危機もあれば、グローバルな資源問題、環境問題も深刻である。アラブの春は大きな犠牲にもかかわらず、期待を裏切って、必ずしも民主化を実現しているわけではない<sup>2)</sup>。

急速な工業社会に突入した中国の環境汚染は気流に運ばれて我が国にも押し寄せている。我が国では東日本大震災と福島原発事故もあれば、北方領土問題に加えて、中国、韓国とのあいだで尖閣・竹島の領有権をめぐる領土問題も発生しており、また再び自民党が政権に就き、TPP への参加をめぐって、国論は割れている。山中伸弥教授の iPS 細胞の研究、ノーベル賞受賞などの喜ばしい快挙もあるが、改革疲れも見える大学教育は、学生が必死で勉強しなくなったせいもあって全般的に不振であり、それは経済の不振と連動しているように思われる<sup>3)</sup>。

こうした事態の多くは予想外のことだったのではないだろうか。政策や意図が結果を出せないことも多いが、意図せざる結果もあれば、予測を超えた事件も頻繁に起こるのが人間社会である。社会が複雑になっていて、情報や医療、科学技術の高度化も凄まじく進んでいるから、人間の手に負えないということだろうか。人智で解決できることもあると思われるが、全体としては、無力感に苛まれることが多い。

- 
- 1) Samuel P. Huntington, *The Clash of Civilizations and the Remaking of World Order*, 1996. 鈴木主税訳『文明の衝突』集英社、1998 年。
  - 2) エマニュエル・トッドは、すべての地域で、識字率の高い達成と出生率の制御によって、民主化が進み市民社会が形成されるという普遍主義的な予測をしているが、大雑把な趨勢としては妥当しているのかもしれない。例えば、トッド、石崎晴巳訳『帝国以後』藤原書店、2003 年、50-62 ページなど。
  - 3) 佐和隆光『経済学への道』岩波書店、2003 年、21-24 ページの、勉強しなくなった日本の若者という把握を参照。

1989年の東欧の革命、冷戦の終結は、いよいよ本格的な国際協調の時代が開かれるのではないかと期待を生み出したが、その後、新たな不安定要因が多数発生して、今日の不穏な情勢が生まれている。とくに大きな要因は次の3つである。

その第1は、経済変動である。20世紀後半に後進国から中進国になった中国やインドのような大国の急速な経済発展による世界の経済バランスの変動である。中国は物づくりを急ぐあまり、海外のブランドのニセモノまで製造して稼いでいるが、それは一部にすぎないと思われる。しばしばアジアの時代と言われるように、当分の間、世界経済の発展の中心はアジアである。アメリカのプレゼンスがすぐに低下することはないが、しかしもはやアメリカが経済力において中国に追いつかれるのは時間の問題となっている。アジアには大きな人口、資源、勤勉がある。インドネシアなどの発展も見逃せない。

第2に、経済変動を激化させ、しばしば攪乱させる金融問題がある。徳なき時代を物語るかのような現象が繰り返されているのはこの分野である。金融派生商品（デリバティブ）が混乱をいつそう深めた記憶は新しいが、資本主義システムはそもそも不安定な変動を伴うシステムであって、資本主義に付随する国際的な金融不安問題はこれからも繰り返すであろう。金融をインフラとして安定させるにはどうすればよいか、智慧が必要である。すなわち、サブプライム・ローンのような問題を起こさないように金融資本をいかにコントロールできるか、エコノミストの手腕が問われ続けるであろう。EUにおけるギリシアなどの小国の債務危機は容易に解決しそうにない。

第3に、様々な国際紛争がある。国連軍が未だ弱いために、国際的、民族的な紛争にアメリカ軍が介入することが多い。アメリカは世界の130カ国以上に軍事基地をもっているが、世界に展開するアメリカの軍事的影響力自体が紛争を生み出しているという側面もある。沖縄で繰り返される米兵の犯罪でさえ大騒ぎになる。ましてアメリカの軍事基地や航空母艦から飛び立つ爆撃機によるイスラム・テロリストへの攻撃は深い憎悪を生み出さずにはおかない。爆撃とそれに対する報復という悪循環は終息の目途が立たない。

確かにアルカイダによる9・11テロ、すなわち、ハイジャックされた旅客

機による世界貿易センタービルの破壊は衝撃的であった。数千名が犠牲となった。このイスラム・テロリストの攻撃に対してブッシュのアメリカは報復に出た。確かにテロは擁護しがたい。しかし、正当性は 100%アメリカにあるだろうか。9・11 自体がそれ以前のアメリカによる様々な抑圧への報復という側面をもっているから、問題は単純ではない。

ブッシュによる大量破壊兵器を口実とするフセインのイラクへの攻撃は今では間違いであったことが明白になっているが、にもかかわらずアメリカは自己批判せず、責任も取っていない<sup>4)</sup>。ハンチントンが警告した文明の衝突が起こっているにしても、まだ深刻になっていないとすれば幸いかもしれない。第二次世界大戦の犠牲者、ナチスの犠牲者、スターリニズムの犠牲者、そして文化大革命の犠牲者がそれぞれ数千万人と言われるのに対して、数千人規模の犠牲者は少ない。しかし、だからと言って、問題が無いわけではない。

イラクでの失敗に懲りずに、アメリカはテロとの戦いを大義に掲げて、アフガンで無差別爆撃を続けている。いつ終息するのであろうか。無垢な非戦闘員がテロリスト以上に犠牲となっているのを、どう受けとめるべきであらうか。戦争では非戦闘員が犠牲になるのはほとんど避けられない。だから戦争は悪であるほかにない。にもかかわらず戦争を未だ廃絶できないでいるのが人類である。人間は愚かなのであろうか。このように 21 世紀の世界は混乱を深めているが、こうした現状を歴史的にどう見ればよいのであろうか。

資源、エネルギーも、人口爆発と環境汚染も、やがてもっと深刻な事態を迎える可能性がある。現代文明が衰退の道に入る可能性はゼロではない。他方、科学技術の発展によって、重大な課題が解決され、いっそう高度な文明社会が実現する可能性も残っている。しかしながら、およそ半世紀前に、ケネス・ボールドィングが『20 世紀の意味』(1964 年)<sup>5)</sup> を書いて、警告した「落とし

---

4) オランダ出身のジャーナリストのカレル・ヴァン・オルフォレンは、現代の混迷をもたらしているアメリカの独善を弾劾し、アメリカの言いなりになっている日本を批判してやまない。数ある日本批判のなかで、とりわけ井上実訳『アメリカとともに沈みゆく自由世界』徳間文庫、2012 年を参照。

5) 清水幾太郎訳、岩波新書、1979 年。

穴」<sup>6)</sup>にはまらない保証はまだないというべきである。

こうした鳥瞰をしてみると、人類の努力と人智を超えた意図せざる結果として文明の発展が実現してきたと説きつつも、権力欲を戒め、将来予測において懐疑的でもあったアダム・スミスの歴史観を振り返る意義に思い当たる。歴史の深く広い認識に立脚して近代文明の処方箋を書いた社会の医師、アダム・スミスの智恵から我々は今なお教わることができるのかではないかと思うのである。マルクスやウェーバー、シュンペーターやブローデルの歴史分析に学ぶことも可能かつ有益あるが、本稿ではアダム・スミスの歴史観を振り返ることにする。それは文明を展望する視座の獲得に貢献すると思われるからである。スミスの歴史観は最近の有力な研究において参照され評価されているという事実もある。

スコットランド出身の現代の歴史家であるニール・ファーガソンは2011年に興味深い歴史書『文明』を出版した<sup>7)</sup>。そのなかで彼はアダム・スミスを引き合いに出しながら、18世紀以降、西洋が覇権をとれた6つの真の原因として競争、科学、所有権、医学、消費、労働をあげた。この6要因が西洋において有機的に結びついて18世紀以降の西洋の発展をもたらしたのに対して、18世紀の段階では西洋に劣っていなかった中国では、この6要因が機能せず停滞を招いてしまったというのである。

しかし、その中国が現在、誰も予想できなかったような急速な経済発展を遂げている。その理由をアダム・スミスの経済発展論によって説明しようと試みたのがジョヴァンニ・アリギ『北京のアダム・スミス』<sup>8)</sup>である。とはいうものの、中国の近年の経済発展は、考えてみれば当然の事態である。ヒュームは学問・技芸はどこにでも移植可能であると説いた。とくに技術に依存する製造業は、技術が伝播すれば、低賃金の後進国が交易条件で有利となり、当該産業は移転するであろう。そのことはすでにヒュームが250年以上前に提示した

6) 落とし穴とは、人口爆発、戦争、経済発展、エントロピー、イデオロギー等である。

7) Niall Ferguson, *Civilization: The Six Killer Apps of Western Power*, 2011, Allen Lane. 仙名紀訳『文明—西洋が覇権をとれた6つの真因』勁草書房、2012年

8) Giovanni Arrighi, *Adam Smith in Beijing: Lineages of the Twenty-First Century*, London: Verso, 2007. 中山智香子他訳『北京のアダム・スミス』作品社、2011年。

経済原理であったし、それは今なお妥当するであろう<sup>9)</sup>。先進国は新技術を開発し、それを保持し続けなければ、発展できない時代になってきたのである。

## 2 歴史分析の複数の概念装置

『国富論』(1776 年)において詳論され、また『法学講義』(1762-4 年)でも展開されたアダム・スミスの歴史論は、経済史や統治史・国制史に留まらず、その包括性において文明史と言うべき歴史論であって、異なる複数の対概念あるいは分析枠組を駆使して文明社会の構造と動態——歴史の変容——を解明するものであった。大きな枠では、未開・野蛮と文明の二分法が駆使されているし、文明に関しての古代と近代の二分法がある。スミスは、大きな歴史の図式として、ギリシア・ローマの古典古代において頂点に達した古代文明は生成—発展—停滞—衰退の循環を終え、その後起こった近代文明は今や発展の絶頂に近づきつつあるが、やがて衰退し 2 循環を完結するかもしれないという懐疑的な推論をもっていたように思われる<sup>10)</sup>。文明が頂点に達すると必然的に衰退に向かうというのは、多くの思想家の観察であった<sup>11)</sup> が、スミスは必然論に対しては懐疑的で、どちらに向かうかは条件次第と考えていた。

スミスは社会を豊かにするにはどうすればよいかを考えた。『国富論』は社会を構成する全員が多かれ少なかれ商人となる「商業社会」こそ豊かな社会たりうることを証明しようとした書物である。スミスは商業社会=市場経済の構造とその変化・動態を解明しようとした。商業社会はそれと異なる社会類型を

9) ヒューム「貿易の嫉妬について」、田中秀夫訳『政治論集』京都大学学術出版会、2010 年、311-6 ページ、その他。

10) 「エリザベスの治世の開始からいまや 200 年以上になるが、この期間は人間の繁栄が通常持続する期間としては、最長である。」Adam Smith, *Wealth of Nations*, Oxford U. P., 1976, Vol. II, p.425 (以下 WN)。水田洋監訳『国富論』岩波文庫、2、252 ページ (以下、『国富論』分冊数、ページのみを記す)。最初の文明はギリシア・ローマの古典文明である。そして第二の文明はローマ帝国没落後のゲルマンのローマへの移住に始まる文明であって、農耕段階から商業段階への連続的発展をスミスは『国富論』第 3 篇で描いている。

11) グラスゴウ版『国富論』の編者 (R. H. Campbell, A. S. Skinner, W. B. Todd) は、カンティロン、ヒューム、ハチスン、ジェイムズ・ステュアート、ケイムズにもこの必然的衰退論があると指摘している。WN, II, p.425 note.

比較によって理解する手段ともなった。そして主権者と国民を富裕にする経済学 (Political Economy) という学問を確立しようとしたのである。

スミスは社会が発展しつつあるか、停滞しているか、衰退に向かっているかという状態との関連で、需要供給関係を介して、経済構造、すなわち富の生産と分配の状態がどうなるかを考察し、賃金・利潤・地代の変動、商品の価格や価値の変動を分析する価格論を構築し、それによってダイナミックな「商業社会」の変動の原像を描いた。そして、スミスは国民の富裕の増進という観点から、スミスの時代に主流となっていた重商主義政策を、「国益」を標榜するものの、実際には一部の特権階級に利益を誘導する、したがって国民全体の利益を害う政策である——それは現在でもなおより洗練した形で繰り返されている事態ではないだろうか——として批判し、様々な職業に分化した諸階級の自由な経済活動こそ国民全体を豊かにするとして自由を擁護した。

スミスによれば、商業社会は文明の歴史的な到達点であった。スミスは文明に先立つ時代と社会があるとし、それを未開社会として考えており、したがってスミスの文明社会論では未開社会と文明社会という二分法が文明循環論と組み合わされている。未開時代、未開社会とは資本蓄積に先行する時代、社会であるが、それは生活様式の4段階論ではほぼ最初の採集・狩猟段階に相当する。未開は野蛮でもある。遊牧民は未開ではないが野蛮ではあるとスミスは見えており、その意味では未開と野蛮は区別されてもいる。

アダム・スミスが発案者かどうかは必ずしも明確になっているわけではないが、そう目されている生活様式の4段階説によれば、狩猟 (Hunters)、遊牧 (Shepherds)、農耕 (Husbandmen)、商業 (Commerce, Merchants) の段階が区別される<sup>12)</sup>。これはすべての社会が辿る段階ではない。例えば、インディアンは未開の狩猟民族であることをスミスは認識しており、彼らが必然的

12) この有名な4段階理論については、いまではミークの研究 (Ronald Meek, *Social Sciences and the Ignoble Savage*, Cambridge U. P., 1976) にホントの研究が加わった。

ホントは狩猟、遊牧、農業の3段階は広く知られていたが、商業段階を付け加えたのはスミスであり、商業社会の概念はプーフエンドルフの社交性の概念にすでに潜在的に存在していたという解釈を提出している。Istvan Hont, *The Jealousy of Trade*, Harvard U. P., 2005, Chap. 1. 田中秀夫監訳『貿易の嫉妬』、昭和堂、2009年。

に農民になるとはスミスは考えていない。したがって、4 段階は必然的な法則ではなく、4 段階を経験する地域もあれば、しない地域もあるという理解なのである。世界の諸民族の現状と歴史に強い関心を抱いていたスミスは、自らの該博な知識によって、商業社会段階になっているのはヨーロッパや北アメリカなどの一部の地域に留まっており、地上の多くの地域や国民は未だ圧倒的に前商業社会であって、彼らは部分的に商業社会化に晒されているものの、主に自給的な狩猟、漁業、遊牧、農業で暮らしていると理解していた。もちろん、中国が古代に高度に文明化し、それ以来長く停滞している——衰退はしていない——老大国であるという認識はスミスのものであった。

スミスの発展史観は、可能性の史観であって、決定論ではなかった。この点は重要である。生活様式の 4 段階説も決定論ではない。未開から文明への段階は、今述べたように、狩猟、遊牧、農耕、商業という具合に高度化する段階として把握されている。それは富裕化の段階でもあった。統治組織もそれに対応して発展する。しかし、これは必然というわけではない。長期的に世界の文明史はこうした段階を経過して進むのではあるが、同時代にあっても未開状態に暮らす民族もいるし、衰退に向かう民族もいるというのがスミスの認識である。もちろん、遊牧社会もあれば、自給的農業を営む社会も数多くある。それぞれの地域や民族は、様々な事情に影響されて、それぞれの段階の状態にあるというわけである。しかしながら、スミスが段階の進行を文明化として肯定的に捉えていることは明らかである。それはより多くの民衆が豊かに暮らせることをよしとするからである。

スミスはグラスゴウ大学における法学講義において統治史を扱う公法の部分で、ゲルマン民族のローマ支配以後の統治は、自由土地保有統治 (Allodial Government) から、封建的統治 (Feudal Government)、絶対的統治 (Absolute Government) を経て、現在の統治 (弟子ミラーはそれを商業的統治 Commercial Government と呼んでいる) へと発展してきたという歴史観を提示している<sup>13)</sup>。

13) Adam Smith, *Lecture of Jurisprudence*, Oxford U. P., 1978. 水田洋訳『法学講義』岩波文庫、2005 年、78 ページ以降。水田洋他訳『アダム・スミス法学講義 1762-1763』名古屋大学出版会、2012 年。

これもまたスミスの歴史把握の一環である。この統治の発展論は、ミラーが継承し、『階級区分の起源』（1771年）、とりわけ『イングランド統治史論』（1787年）で援用している<sup>14)</sup>。

スミス＝ミラーのこの統治史の把握はユニークである。それまでの統治論はおおよそのところ社会契約論と政体比較論から成っている。ホブズ、プーフェンドルフ、ロックなどの17世紀自然法学者の議論はおおむねそうである。スミスの師のハチスンにしても同じである。王政復古時代にイングランドの封建法研究は飛躍的に発展したと言われる<sup>15)</sup>。そうした法制史研究をスミスはよく研究している。法学講義では間に合わなかったが、『国富論』には間に合ったので、スミスは直近のブラックストン『イングランド法注釈』（1765-9年）を参照している。スミスは18世紀イングランド法の権威であった。スミスは専門的なローマ法学者であったわけではないが、ローマ法についても専門家に負けない該博な知識をもっていた。スミスの統治の段階論は、おそらくモンテスキュー『法の精神』（1748年）や幾多のコモンローヤーの国制論、英仏の封建法論などを広く参照してスミスが構築した独自の段階論ではなかったかと思われる。

この段階論のスコープは『国富論』第3編のローマ帝国没落後のヨーロッパの経済史を描いた部分の範囲とおおよそのところ対応する。『国富論』では統治史・法制史が経済史へと深められているとも言える。統治の歴史の根底に所有権の歴史、農業と商業などの経済発展の歴史があることが、スミスによって描き出された。しかも、資本投下の逆転という問題をスミスは提起し、資本投下の自然秩序（農業→国内商工業→外国貿易）が人為によって攪乱された（外国貿易→国内商工業→農業）にもかかわらず、ローマ帝国崩壊以後のヨーロッパでは都市の発展が農村の発展を牽引することになって、農工分業が深化し、商業社会へと向かって前進したと把握した。

14) この点は筆者の『啓蒙と改革—ジョン・ミラー研究』名古屋大学出版会、1999年、181ページ  
その他を参照。

15) John Pocock, *The Ancient Constitution and the Feudal Law*, Cambridge U. P., (1957) 2nd ed. 1987.

ヒュームも『イングランド史』（1754-62 年）において政治史を経済史との関連で理解しようとしたが、しかし、主として政治的な「自由」がいかにして実現したかという自由の発展史を描き出すことが目的であったためもあって、そこでは経済史が系統的に展開されているわけではない。モンテスキューの影響を受けてもいたジェイムズ・ステュアートは『経済の原理』（1767 年）において豊富な経済史認識を示しており、それが彼の理論形成を支えたように思われるが、その意味ではスミスはヒュームとともにステュアートの継承者であったとも言えるであろう。その点の個別的な検証はここでは行えない。しかし、社会構造史としての経済史はスミスにおいて明確な史論となっており、スミスの画期的な発明と言えるかもしれない。

『国富論』は「経済学」の書であるが、同時に未開から文明への発展（および衰退）の分析を行っており、「文明の盛衰」論の書として読まねばならない特徴をもっていると言ってよい。「文明の盛衰」論として著名な作品として、モンテスキューの『ローマ人盛衰原因論』（1734 年）がある。モンテスキューは、ローマ人の帝国への拡大発展は高度なローマ文明の普及を意味したが、しかしながら富裕が奢侈と遊惰をもたらし、奴隷の反乱と士気に勝る野蛮なゲルマン人の侵攻を招き減んだという分析を行った。こうしたモンテスキューの分析をスミスは参考にしたであろう。

近代ヨーロッパ文明の起源がローマなのかゲルマンなのかの論争はフランスで盛んであった。デュボスとブランヴィリエの間で激しく戦わされたこの論争は、モンテスキューのゲルマン優位で決着を見た。スミスが関連文献を所蔵していたことは言うまでもない<sup>16)</sup>。しかし、スミスが近代ヨーロッパの国制を未開なゲルマン人がもたらしたというような単純な説をとるはずもなかった。

偉大なローマ「文明の盛衰」は、啓蒙の時代の多くの知識人の共通の関心事であったし、『国富論』の前提でもあった。『国富論』のエッセンスを財の生産と配分の理論と見るのが間違いという訳ではないが、同時にそれは複雑で広範囲な文明の盛衰の分析を行っており、『国富論』は経済（財の生産と配分、消

16) Hiroshi Mizuta, *Adam Smith's Library*, Oxford U. P., 2000 を見よ。

費)をベースにした文明の総合命題であるとも言う。そして経済史をベースにしない限り、文明の発展史は、スミスの友人でもあったアダム・ファークソンの『市民社会史論』(1767年)がそうであるように、土台のない政治史・精神史・文化史にとどまるであろう。

上述のような多数の概念枠組が組み合わされて構築されているのがスミスの歴史観であるが、とくに文明の発展、停滞、衰退をもたらす要因が何であるについてのスミスの認識が重要である。その要因は、政治的、経済的、社会的その他に渡っており、案外込み入った緻密な分析がなされている。それではスミスの歴史観について、いっそう立ち入って検討することにしよう。

### 3 古典古代優位説批判

現代では古代と近代の優位比較はあまり行わない。近代が古代を超えたことは自明と見なされているからであろう。古典古代の文明は哲学をはじめとする学問と彫刻や建築、都市構築などを誇るものの、奴隷制に立脚した峻厳極まりない差別社会であり、産業としては技術の乏しい農業と素朴な手工業しかなく、多くの人口を養うことができなかつたのに対して、近代は科学革命と勤労に基づく商工業によって豊かで自由な文明社会・市民社会を実現したから、比較をするまでもないというのが、現代の常識であろう。

しかし、古代人が人間精神や人間本性において現代人に劣っていたかどうかは分からない。ハンナ・アレントが「活動的生活」*vita activa*の理念に着目して古典古代の偉大さを称揚し、労働による物質的な生存に関心をシフトした近代社会を凡庸な、人間の本質が疎外された社会であると批判したことも記憶に新しい<sup>17)</sup>。そうだとすると、多くの人によって、人権思想がない文明、奴隷を搾取する文明であるという理由で、古典古代の達成は根本的に批判されてきた。

ベーコンは「知は力なり」と述べて近代科学に期待し、弟子のホップズはアリストテレスの差別的人間観を批判し、平等な人間本性の分析を基礎として契約による政治社会の構築を説いたが、それは17世紀のことである。とはいえ、

17) Hannah Arendt, *The Human Condition*, The University of Chicago Press, 1958.

志水速雄訳『人間の条件』ちくま学芸文庫、1994年。

彼らはまだ近代の優位を主張することはできなかつた。ルネサンスから 18 世紀の啓蒙までの間に、古典古代と近代の評価が逆転したことは確かである。古代賛美から古代批判への転換点は 18 世紀にある。なぜ逆転したのか。それは、この間に、「文明化」が急速に進んだからである。

すなわち、科学革命と印刷術の普及によって学問が長足の進歩を遂げ、各地に大学やアカデミーが設けられ、マキアヴェッリ、ベーコン、ガリレイ、ライプニッツ、ハーヴェイ、デカルト、ロック、ニュートン、ヴォルテール、モンテスキュー、ヒューム、ルソー、スミス、カントなど、たくさんの天才の偉業が生まれた。このリストはもっと増やすことができる。商工業が盛んになり、言論出版の自由もジャーナリズムも漸次確立した。宮廷・サロン・国際都市が各地に生まれ、議会政治も広まり、社交世界・公共圏が拡大し、社会自体も市民社会として繁栄するようになった。こうして近代人は自信を持ち始めた。

ルネサンスで古典古代を復興し、その天才たちの業績を研究すること——それがヒューマンニズムの原義である——から始まった近代以降の知識人は、やがて古代を乗り越えようとして古代を批判するようになった。プラトンの数理解的世界解釈や哲学者政治、アリストテレスの倫理学と政治学、経験主義と機能法はしばしば称賛された。しかし、少なくともホッブズの弾劾以来、アリストテレスの目的論的世界理解と差別的人間観は間違いであるとして批判されてきた。またエルンスト・カッシーラーの『国家の神話』(1946)<sup>18)</sup>が代表的であるがプラトンのユートピア思想がナチズムの誕生に影響したと指摘されてきた。

よく知られているように、17 世紀末にはフランスで「古代・近代優越論争」が起こった。それは文芸論争であったが近代人が自信をもつようになってきた証拠である。やがて論争は社会の優劣を問題にするようになった。人口論争はその一環である。人口に関しては 18 世紀中葉までは、モンテスキューのような古代優位論がむしろ主流であった。社会に関する近代の優位論の決定的な画期は、ヒュームが社会の原理を基準に近代に優位を認めたことに求められるかもしれない。ヒュームを継承したスミスの文明史観=歴史観が古代優位説に

18) Ernst Cassirer, *The Myth of the State*, Yale U. P., 1946. 宮田光雄訳『国家の神話』創文社、1960 年。

立っていないのは当然であろう。この点ではモンテスキューとウォレスが古代派であるのに対して、ヒュームとスミスは近代派なのである。前者は古典共和主義者であったが、後者は近代共和主義者であった。

ヒュームはウォレスとの古代人口論争において、参照可能な文献を網羅して吟味を重ね、古代人口を推計し、そのうえ社会の原理を比較して、近代に優位を与えた<sup>19)</sup>。実証的な人口統計は古代にも近代にも部分的で不正確なものしかなかったが、ヒュームは勤労社会としての近代の商業社会の人口扶養力が大きいことを明確に把握していた。人間本性は快活な生活を選好するが、軍事的な古代社会より近代の商業社会のほうが快活な生活を可能にする点ではるかに優れているという認識が根底にあった。

「すべてのわが近代のさまざまな改善と洗練は、人間の生存を容易にし、その結果、人間の増殖と増加に何ら貢献する働きをしなかったであろうか？ 機械的技術におけるわれわれの優越、新世界の発見、それによって商業が非常に拡大したこと、郵便制度の確立、および為替手形の使用、これらはすべて、技術と勤労と大きな人口の奨励にきわめて有用であるように思われる。もし、われわれがこれらのものを取り除くならば、われわれはあらゆる種類の仕事と労働にどれほどの抑制を加えることになり、どれほど多数の家族が欠乏と飢えによってただちに滅びることであろうか？」<sup>20)</sup>

スコットランドの長老派の牧師であったウォレスは、穩健派の先駆者であったとしても、奢侈的な商業文明が精神の墮落と習俗の腐敗を引き起こしていると憂慮していた点で、1720年代生まれの穩健派の世代、商業文明——富裕と洗練——を受け容れたロバートソンの世代と違っていた。同じ穩健派でも最後のローマ人たることを自認したファーガスンは英雄的な古代人を賛美したから、ウォレスに近かった。こうした点で、ヒューム、スミスと穩健派の主流派は近く、ウォレスとファーガスンは彼らに対立していたように思われる。二人はモ

19) ヒューム、田中秀夫訳『政治論集』京都大学学術出版会、2010年、155-267ページ。

20) ヒューム、同上、209ページ。

ンテスキューヤルソーにも近かった。

古代と近代の優位論争は 18 世紀の半ばまで拮抗していた。また中国とヨーロッパの優位の比較についても決定的な差はないというのが、大方の意見であった。スミスやヒュームは歴史、文明、学問、技芸の進歩を説いた。彼らは知識を組み込んだ商工業 (Commerce, Arts and Industry) を基礎とする近代文明を支持した。そして彼らの社会の原理論からすれば、オランダ、イングランド等の勤労資本主義の原理が、やがて西洋全体に波及しさえすれば、西洋の世界支配、世界の文明化を可能にすると予測できたであろう。にもかかわらず、彼らは必ず波及するという確信をもてなかった。人間の知識と道徳的な能力に限界を見ていたのである。また波及したところで、その支配は一時的であって、やがて後進地域が追い上げ、追いつくであろうという予測がヒュームの見解であったし、スミスにしても西洋の支配が長く続くとは確信をもって考えられなかった。人間の傲慢、権力欲、腐敗墮落、無思慮、無関心などの要因が、そのような順調な発展を妨げる可能性が十分にあると彼らは考えた。自由貿易帝国主義でさえ彼らには一つの可能性にすぎなかった。

ヨーロッパ近代における火薬と火器の発明によってヨーロッパ文明社会は戦闘において圧倒的に優位に立ったので、犖猛な野蛮民族によって征服される可能性はなくなった、とスミスは考えているし、火器は高くつくから戦争が限定されるようになったとも言う<sup>21)</sup> が、だからといって、近代文明が永続する必然性がある——無限進歩——とは言えないというのが、スミスの見解であった。人間本性は完全ではないと考えたからである。それが彼らが穏健かつ寛容であった理由でもあるだろう。しかし、不完全な人間は教育によって本性を磨き、知性を高め情念を純化し徳を身につけなければならない。そのために青年

21) 「近代の戦争では、火器に要する大きな経費が、その経費をもっともよくまかなえる国民を、したがって豊かで文明化した国民を、貧しくて野蛮な国民にたいして、明らかに有利にする。古代においては、豊かで文明化した国民は、貧しくて野蛮な国民にたいしてみずからを防衛するのは、困難だということを知った。近代では、貧しくて野蛮な国民は、豊かで文明化した国民に対してみずからを防衛するのは、困難だということを知る。火器の発明は、一見したところではきわめて有害なものに見えるけれども、文明の永続にとっても拡大にとっても、確実に有利なものである。」WN, II, p. 708. 『国富論』3、373 ページ。

教師スミスもまた講義に努力した。『道徳感情論』（1759年）はそのようなスミスの姿勢を物語っている。スミスは老年を迎えて「道徳感情の腐敗」を問題にし、人は誰から見ても有徳と思われる人間になるように努力せよと説いた。

人間本性の不完全認識は、過度な設計主義——体系の精神——社会学至上主義を禁じるであろう。また立法者への過度の期待もスミスはもたなかった。もちろん、スミスは為政者の義務として、国防と司法と道路、橋、運河、港湾などの整備と貨幣の铸造、郵便事業などの公共事業と教育施設の整備をあげている。当然、為政者は一部の国民に利益を誘導してもいけない。公平で公正な執政を目指さねばならない。そのような為政者のために、また為政者を養成する知識人のために、言い換えれば社会のなかで公共的使命を担っている階級を啓蒙するために、スミスは『国富論』を書いたのである。

火器は戦争の限定を導いたかもしれないが、しかしやがて技術革新によって大量殺人兵器が開発され、国民を総動員する戦争が起こり、大量殺人をもたらすようになるという予測はスミスにはできなかった。なぜなら軍事は不生産的であり、成年男子 100 人につき一人が限度と考えたからである<sup>22)</sup>。

奴隷制さえ容易に廃止できないのは、自由な労働者を雇う方が経済的に有利であるにもかかわらず、奴隷制プランターの支配欲を容易に断念させられないからであるとスミスは述べている。人間は権力欲に溺れやすく、強欲に駆られることもあれば、怠惰にも、無関心にもなりやすいという欠陥を認めたのである。この点で、人間の完成を夢見ていたコンドルセとは違って、スミスはリアリストであった。にもかかわらず、スミスは自然的自由という無制約の社会を夢見なかったわけではない。しかし、それをスミスは夢でありユートピアだと断言した。

---

22) 「近代ヨーロッパの文明諸国民のあいだでは、兵役の費用を支払うどの国でも、破滅することなく兵士として使用できるのは、住民の 100 分の 1 までだと一般に計算されている。」WN, II, p. 696. 『国富論』3、352 ページ。

## 未開と文明

スミスは未開と文明の二分法を用いることも多い。これは啓蒙思想家の常套句でもあるが、ルソーなどは未開から文明への発展は墮落でもあったとして、いわゆる「高貴な未開人」の思想を主張した。ルソーは未開人の精神的な力を称賛した。例えば、勇気や同胞愛で文明人は未開人に劣るというのである。

アメリカの先住民（インディアン）をいかに理解するかは、当時のフランスやイギリスなどの啓蒙知識人の共通の関心であった。進化論の先駆者でもあったビュフォンはアメリカ退化説を主張した。すべてのものがアメリカでは退化するというのである。それは事実かどうか、事実とすればそれはなぜか、風土のせいかなどが争われた。アメリカ退化説はさすがにスコットランドでは支持されなかった。むしろアメリカの発展可能性への期待が大きかった。しかし、それはインディアンへの期待ではなかった。ジェファソンは退化説を必死に論駁した<sup>23)</sup>。

スミスの弟子のミラーも未開人が剛毅、すなわち忍耐力で文明人に勝ると述べている。しかし、それは本性的にそうだというのではなく、生活が困難に満ちている環境のせいだというのがミラーの見解である<sup>24)</sup>。スミスも未開人がそもそも徳に優れているとは考えていない。

アダム・ファーガソンは未開から野蛮（古代専制国家）へと社会は墮落してから文明化＝洗練に向かうと理解した。商業社会においては無知が勤労の母となり、軍事が軽視されがちとなり、したがって外敵の侵攻を受けやすくなる。文明生活では人々の精神が弛緩し、腐敗が不可避であり、その克服のためには民兵制度を導入し武勇の精神を回復しなければならない。その意味で、戦争は活力を維持するうえで有益でさえある。ファーガソンは商業文明を進歩と見ながらも、このように古代的な武勇心を取り戻そうとした。これは古典共和主義のように見えてもはや古典的ではなく、ファーガソンは古代と近代の総合を目指したのである。武勇心の維持というのはスミスの関心事でもあった。

近代共和主義は文明化—生活様式の変容に対応しようとして、社会、道徳や

23) 筆者の『アメリカ啓蒙の群像』名古屋大学出版会、2012年、558-9ページを参照。

24) 筆者の『啓蒙と改革』前掲、191ページを参照。

経済に目を向けるようになる。ポーコックやフィリップスはそれを徳から生活様式へのパラダイム転換として把握した<sup>25)</sup>。ルソーは文明墮落論を説いた点で、ファーガスンに近い点があるが、ルソーももはや純粋な古典共和主義者ではなかった。ハチスンもそうであるが、近代共和主義者は生活様式の洗練による徳の概念の変容を説き、政治社会の商業社会化、商業を基盤とする社会の進歩と発展を展望するようになった。古典共和主義者は多かれ少なかれ第一原理＝原初からの腐敗墮落論をとる。近代共和主義者には依然としてそのような発想、古典的遺産が重くのしかかっていたことも確かである。パラダイム転換は様々な障害とぶつかりながら多様な形で進んで行ったのである。

ファーガスンと違って、スミスは未開と野蛮をこのような形で峻別したわけではない。未開を野蛮とし、未開賛美を否定してはじめて進歩の思想が成立し、リアルな社会認識の学としての社会科学が生まれたのだというのが、ミークの言いたかったことである<sup>26)</sup>。スミスは農村生活を賛美したけれども、未開を賛美するロマン主義はスミスのものではない。未開状態に留まっている民族と文明化した民族の違いは優劣の違いではなく、定常状態を選んだ民族（冷たい社会）と発展を選んだ民族（熱い社会）の違いであるというのは、ルソーを賛美するレヴィ＝ストロースの認識であったが、彼と違ってスミスが「富と徳」の両立を価値として支持している点で、未開ではなく文明を支持していることは明らかである。

## 分業展開史論

未開と文明の二分法は、ホップズやロックの自然状態と社会状態ないし国家の二分法にとって代わる概念装置であった。推測的歴史の概念を用いて文明史の批判的省察を行ったルソーは、依然として自然状態と社会状態の二分法も用

25) John Pocock, *Virtue, Commerce, and History*, Cambridge U.P., 1985. Esp. Chap. 2. "Virtues, Rights, and Manners". ジョン・ポーコック、田中秀夫訳『徳・商業・歴史』みすず書房、1993年、第2章など。Nicholas Phillipson, "Politics, Politeness and the Anglicization of the Early Eighteenth-Century Scottish Culture", in *Scotland and England 1286-1815*, ed. by Roger Mason, John Donald, 1987.

26) Ronald Meek, *Social Sciences and the Ignoble Savage*, Cambridge U.P., 1976.

いたが、しかしホップズ、ロックと違って、そこには歴史の発展（あるいは墮落）という時間意識が介在していた。17 世紀の自然法思想家と異なって 18 世紀の啓蒙思想家は未開から文明への社会の発展という視点を以て、社会把握を深めることができた。ヒュームは商業のもつ社会変革力と農工分業による国内市場の発展に注目したが、ヒュームの遺産を継承して、またジェイムズ・ステュアートを批判しつつ、スミスは分業発展史観を彫琢した。

「よく統治された社会では、分業の結果生じるさまざまな手仕事全体の生産物の大幅な増加が、最低階層の民衆にまで広がる普遍的な富裕をつくりだす。どの職人も自分自身が必要とするところを超えて、処分しうる自分の製品を多量にもっており、また他のどの職人もまったく同じ状況にあるため、彼は彼自身の多量の品物をそれらの人々の多量の品物と・・・交換することができる。彼は彼らにその必要とするものを豊富に供給し、また彼らは彼が必要とするものを同時に豊富に供給する。そして全般的な豊富が社会のすべてのさまざまな階層に普及するのである。」<sup>27)</sup>

スミスが経済発展の原因として交換と分業——分業による生産力の向上——を強調したことは周知の通りである。文明社会の発展をスミスは階級関係の発展としても理解したが、それ以上に分業展開史として把握した。分業の展開は様々な職業の分化・独立であり、富裕化であり、階級関係の発展と変容であり、国家の組織化であった。

スミスが生産性を重視したこともよく知られているであろう。スミスは農業の生産性を最高と考えていた。産業としての重要性は製造業、国内商業、外国貿易の順となる。スミスは生産的労働と不生産的労働を峻別し、その比率を重視した。

---

27) WN, I, p. 22. 『国富論』1、33-34 ページ。

## 社会変動の原因論

スミスの視野にとらえられた社会変動因子には、風土、河川交通の便などの地理的要因もあったが、生産力、知識と科学技術、利害関心と勤労の意欲の他に、流行、慣習、先例、法律、権威、効用、政体、意図、陰謀、革命といったものもあった。逐一立ち入ることはできないが、モンテスキューの視野にあった様々な事物の間の関係としての法はスミスにおいては、たんなる相関関係ではなく、世界の歴史的動態の構造として位置づけられた。その意味で、スミスは先駆的な構造主義者、あるいは動態的文明史家であった。

マキアヴェッリの第一原理への復帰は、ヒュームにおいては名誉革命体制の原初への復帰が望ましいというように、継承されていたが、スミスにはそのような意識はあまり見られない。スミスの文明社会論において決定的に重要なのは分業、協業、交換、市場、勤労、生産力、生産的人口と不生産的人口の比率、資本蓄積、資本投下順序、貨幣、信用制度、自由競争、自由貿易、私有財産、軽い税と、正義（司法の確立）、国防、教育などである。スミスは名誉革命によって樹立された「自由国制」を支持していた。スミスは、イングランドとオランダを最先進国と見ており、そこでは最大の自由があり、その自由が富裕を可能にしていると考えた。しかし、戦争と戦費調達手段としての公債、そして商工業者の談合やロビー活動、その結果としての重商主義的な規制を有害とし、植民地争奪戦争や帝國的な植民地支配を批判した。スミスは所有者のない未開地への植民はもとより肯定したが、スペインのコンキスタや東インド会社のインドでの取奪は強く弾劾した。

一方、スミスは北米植民地の高度成長を賛美していた。スミスは北米植民地の格上げ、すなわち大ブリテンへの合邦を望ましいと考えていたが、しかし、経費問題から最終的に北米植民地の独立を支持した。ただし、スミスが北米植民地への入植に当たって植民者が原住民から暴力的に土地を奪った事例についてどの程度認識していたかには疑問の余地がある。

#### 4 意図せざる結果と歴史

フォーブズ<sup>28)</sup>はヒューム、スミス、ミラーを懐疑的ウィッグ主義者として一括した。彼らは基本的に同一の思想傾向をもっており、同時代のなかで、社会認識において科学的あるいは非ドグマ的（したがって懐疑的）という点で抜きん出ているというのである。

フォーブズによれば、彼らは歴史の展開の理解に人知を超えた論理を見出し、それを「意図せざる結果」という概念によって表現したが、それは説明の放棄ではなく、意図を超えた帰結がいかにもたらされたかについて、可能な限り因果論的、学問的に説明しようとした証だというのである。この解釈は啓発的であろう。

歴史あるいは社会に働く作用因が多数あることを啓蒙思想家は理解するようになっていた。そして総合的に見て、文明は進歩に向かっていると彼らは考えるようになった。先端的な啓蒙知識人にとって、世俗の歴史は神の摂理によって説明できるものではなかった。また陰謀史観も彼らは採用しなかった。さまざまな原因、物理的ないし自然的原因と道徳的ないし社会的原因が働いて、その総合として社会と歴史は変動するという総合的因果論が彼らの共通の見解であった。全能の立法者神話を彼らが否定したのは客観的な経験的分析の結果であった。社会契約説もフィクションとして退けられた。「事物の自然の成り行き」として歴史の展開は表現されたが、それは単純な意図や陰謀による歴史の単線の理解を間違いと見なしたからである。彼らによれば、様々な原因の複合によって結果は生み出されるのである。

ヒュームは党派性を批判した。「事物の自然の成り行き」あるいは事物の幸運な複合によって、大ブリテンは歴史上かつてない自由で豊かで活力ある文明社会を今や実現しつつあった。オーガスタン時代の繁栄、「ウォルポールの平

---

28) Duncan Forbes, “Scientific Whiggism: Adam Smith and John Millar”, *Cambridge Journal*, Vol.7, 1954. Do., “Sceptical Whiggism, Commerce and Liberty”, in *Essays on Adam Smith*, eds., by A. Skinner and T.D. Campbell, Oxford U.P., 1975. Do., *Hume’s Philosophical Politics*, Cambridge U.P., 1975. 田中秀夫監訳『ヒュームの哲学的政治学』昭和堂、2011年。

和」は、名誉革命と産業活動の結合がもたらしたのである。したがって、ウィッグとトーリーの党争が激化することをヒュームは避けさせようとした。ジャコバイトも大ブリテンの公共の利益にとっては否定すべき存在であった。ヒュームはピューリタン革命を必ずしも評価しなかった。カトリックの狂信とピューリタンの熱狂を退け、温和と寛容を求めた。党派精神と党争は価値の多様性と関係していることを知らないわけではなかったが、それが社会を必要以上に混乱させるとというのが、ヒュームの診断であった。

歴史が全体としてよい方向に向かうのは、多くの人間が自己改善、自分のよりよい生活を求めて努力するようになったからであると彼らは考えた。その点をスミスはとりわけ強調した。スミスが、例えば市場メカニズムの好都合な仕組みに関して、神の見えざる手の働きに言及したとしても、それは総合的因果論、分析的説明の放棄ではなかった。スミスによれば、分業も人間の意図せざる結果であった。

「これほど多くの利益を生みだすこの分業は、もともとは、全般的富裕を予見し意図する人間の英知の結果ではない。それは、そのような広範な有用性を考慮していない人間本性のある性向、すなわち、ある物を他の物と取引し、交換し、交易する性向の、きわめて緩慢で漸次的ではあるが、必然的な結果なのである。」<sup>29)</sup>

はじめに交換ありき。交換性向は比喩にすぎず、スミスが言いたいのは交換が次第に拡大する過程と分業の進展が対応するという交換＝分業展開史観である。

「いったん分業が完全に確立してしまうと、人が自分自身の労働で充足できるのは、彼の欲求のうちのきわめてわずかな部分にすぎない。彼がその欲求の圧倒的大部分を充足するのは、彼自身の労働の生産物のうちで彼自身の消

---

29) WN, I, p. 25. 『国富論』1、37 ページ。

費を超える余剰部分を、他人の労働の生産物のうちで彼が必要とする部分と交換することによってである。こうしてだれもが交換することによって生活するのであり、いいかえれば、ある程度商人になるのである、社会そのものが商業的社会と呼ぶのが当然なものになるに至るのである。」<sup>30)</sup>

### 自生的秩序の思想

意図せざる結果を自生的秩序の思想として解釈したのがフリードリヒ・ハイエクであり、ハモウィーもそうである。ハモウィーはスコットランド啓蒙の自生的秩序論を詳しく調べている<sup>31)</sup>。

オーストリア学派経済学者として 1930 年代の時代経験を分析しつつ、ロンドンに定着したハイエクは、社会主義の諸類型やケインズ主義を「隷従への道」に導く思想として断罪し、市場経済の復権を提唱していた<sup>32)</sup>。同じ時期にハンガリーからブリテン（オックスフォードとロンドン）を経てアメリカに渡ったエミグレのカール・ポランニーは市場経済をもう一度社会に埋め戻す道を模索していた<sup>33)</sup>。ポランニーはスミスの自由主義思想を顧みなかった。スミスは交換を未開人に投影するという間違いをおかしたとポランニーは断罪した<sup>34)</sup>。

30) WN, I, p. 37. 『国富論』1、51 ページ

31) Ronald Hamowy, *The Scottish Enlightenment and the Theory of Spontaneous Order*, South Illinois U.P., 1987.

32) Friedrich von Hayek, *The Road to Serfdom*, 1944. 西山千秋『隷従への道』、新版ハイエク全集第一期別巻、1992 年。

33) Karl Polanyi, *The Great Transformation*, New York: Reinehart, 1944 (*The Origins of Our Time*, Victor Gollanz, 1945). 吉沢英成他訳『大転換—市場経済の形成と崩壊』東洋経済新報社、1975 年。野口建彦他訳『新訳大転換』東洋経済新報社、2009 年。

34) 「太古の人間の経済心理に関するアダム・スミスの見解は、未開人の政治心理に関するルソーのそれと同様に誤りであった。社会の起源と同様に古い現象である分業は、男女の違い、地理的条件、そして個人のもつ資質という諸事実に固有の差異に由来するものであった。さらに人間の取引・交易・交換性向といわれるようなものの根拠は、まったくもってあやふやなものであった。歴史学と民族学においては、これまでにさまざまなタイプの経済が存在し、またそのほとんどは市場という制度を含んでいたことが明らかにされてきたが、われわれの時代よりも前の時代において、たとえ近似的にしる市場によって支配され規制されてきたといえるような経済は知られていなかった。」Karl Polanyi, *The Great Transformation*, Beacon Press, 1957, p.44. 野口建彦他訳『新訳大転換』78-79 ページ。

スミスの知恵を尊重したハイエクは、社会の様々な秩序や制度は人間の行為の産物でありながら、しかし意図を超えたものとして形成され、時間と競争の試練を経て、良いものが生き残ると考えた。そしてそのような認識を自生的秩序の思想 (Idea of Spontaneous Order) と名付けて、その系譜 (genealogy) をたどった。彼は、自由主義の二類型を峻別した。すなわち、人間の作為で何でも可能と自惚れる思想を設計思想と名付け、これを偽の自由主義とした。そしてそれと対立する知的に謙虚な思想を真の自由主義と定義して、これを自生的秩序の思想とする。そして自生的秩序の思想の発生史を思想史のなかに析出すべく、スミスやファーガソンからヒューム、マンデヴィルと廻り、マシュー・ヘイルなどのコモンローヤーまでたどり着いた<sup>35)</sup>。そのことはよく知られているであろう。

ハイエクは知の傲慢を戒めた。知の傲慢は設計主義となって官僚制を生み出し (ベンサム主義)、ユートピア的な社会改造思想 (マルクス主義からケインズ主義まで) となって、暴力革命や、専制的な独裁政治、全体主義を正当化することになる。マルクス主義の世界解放思想 (メシア思想) は人民戦線の犠牲を生み、スターリニズムとなり、また毛沢東の文化大革命の悲劇を生んだ。マルクス主義にしてみれば、これもまた意図せざる結果ではなかったか。疎外論はマルクス主義自体の疎外と神格化に当てはまるのではないか。

現代のマルクス主義者がこうした全体主義を容認しているはずもないけれども、市場経済に代わる実行可能な新しい社会の構想は生まれていない。小共同体では多様な試みが可能だが、大社会はいかに協調が重要であるとしても、交換的正義、すなわち市場を通じた相互性によってしか維持できないであろう。貨幣の廃止も空想的である。市場経済システムは自由競争システムとして相互共存を可能にする平和な協調システムとなしうるはずである。持続する自由な市場は不等価交換としては成立しない。取引する当事者が合意することが等価を意味する。このような等価交換の相互性を公正 (Fairness) と考えることができる。不等価であると当事者が思えば、交渉すればよいのである。もち

35) 関連する論説は、ハイエク、田中真晴・田中秀夫共編訳『市場、知識、自由』ミネルヴァ書房、1986年を参照。

ろん、交渉できる条件の整備が重要である。それには国家や公共の役割もあるが、自身の境遇を改善しようとする個人の努力もまた重要である。

## 5 レトリックとしての次元

意図せざる結果の思想は、スミス以後、ヘーゲルの「理性の狡知」やマルクスの「疎外論」あるいは「物象化論」、ウェーバーの合理化の帰結としての官僚制の化石化＝不合理化論、あるいはまたフランクフルト学派の「啓蒙の弁証法」に引き継がれたと見ることもできるかもしれない。

ハーシュマンは、「意図せざる結果」論を言説として捉えることによって、それを逆転テーゼとして解釈し、無益テーゼ、危険テーゼと合わせて、レトリックの三種類として把握し、その論理的可能性を掘り下げている<sup>36)</sup>。スミスの「意図せざる結果」論は人間の知性と行動の限界を意味するものであるが、社会自体に人間の知性と行動では制御できないメカニズムが働いているのだという事実論理であり、ハーシュマンもそのことは否定していないが、社会分析、歴史分析にとどまらず、社会科学の言説分析にも応用できる論法としての可能性を追及した。

スミスの思想をハーシュマンのレトリック概念で解釈すれば<sup>37)</sup>、スミスはマクロ現象に関して逆転テーゼを用いていることが多いと言えるかもしれない

36) Albert O. Hirschman, *The Rhetoric of Reaction: Perversity, Futility, Jeopardy*, Harvard U. P., 1991. アルバート・O・ハーシュマン、岩崎稔訳『反動のレトリック—逆転、無益、危険性』法政大学出版社、1997年、Do., *A Propensity of Self-Subversion*, Harvard U. P., 1995. 同、田中秀夫訳『方法としての自己破壊—「現実的可能性」を求めて』法政大学出版社、2004年を参照。

37) レトリック、すなわち修辞学はスミスがグラスゴウ大学で講義した科目でもあった。『修辞学・文学講義』（水田洋・松原慶子訳、名古屋大学出版会、2004年）として残された学生のノートを見ると、スミスが説得の方法としての修辞学に強い関心をもっていたことが分かる。ハチスン以来、あるいはその前から、道徳哲学者はしばしば説教者でもあって、道徳哲学と修辞学は関連のある学問であった。言説で社会に訴えるためには、弁論術が重要であった。この伝統はアメリカに渡ったウィザースプーン（John Witherspoon）によってニュージャージー大学（後のプリンストン大学）に伝えられたし、ウィリアム・スモール（William Small）によってウィリアム・アンド・メアリ大学でジェファスンに教えられた。またハーバード大学ではハチスンの『道徳哲学序説』を教科書として用いて学生に教えられた。この点については筆者の『アメリカ啓蒙の群像』前掲を参照されたい。

い。知性をもった個人は自らの意図を実現しようとして目的—手段を考量して合理的に行動する。しかし、その結果は意図せざるものとなってしまうことがある。商工業者は最大利潤を求めて行動するが、大概は平均利潤を得るにすぎない。市場での競争がそのような結果を導く。しかし、これは重大な事態ではない。むしろ、このような競争のメカニズムが競争者の意欲をかき立て、結果として社会の発展をもたらすから、これは幸運なメカニズムなのである。しかし、社会はその社会の許す限りの発展を遂げたとき停滞に逢着する。中国は長く停滞状態にある<sup>38)</sup>。東インドで抑圧と圧政を続けている東インド会社のせいで、植民地インドは衰退に向かっている<sup>39)</sup>。後にインド人によって唱道された「富の流出理論」はスミスの見解であった。圧制や失敗の繰り返しで勤労者など社会的主体の活動意欲が挫かれてしまうとき、社会は活力と緊張をなくし、腐敗墮落して衰退に向かう。この場合は逆転テーゼと無益テーゼが当てはまることになる。

38) 「シナは長いあいだ世界でもっとも富んだ、すなわちもっとも肥沃な、もっともよく耕作された、もっとも勤勉な、もっとも人口の多い国の一つであった。しかしこの国は長いあいだ停滞状態にあったように思われる。500年以上もまえにこの国を訪れたマルコ・ポーロは、その耕作、産業、人口の多さを、現在の旅行者たちが述べているのとほとんど同じいいかたで、述べている。おそらくシナは、彼の訪問時よりもはるか以前にすら、その国の法律と制度の性質上獲得しうるかぎりの富を獲得してしまった。」WN, I, p. 89. 『国富論』1、130 ページ。

39) 「労働の維持にあてられる原資が目だって減少しつつある国では・・・毎年、使用人や労働者にたいする需要は、さまざまな種類の職業のすべてにおいて、前年よりも少ないだろう。上級の種類のなかで育った多くの人たちは、それらの種類の業務では雇用を見つけることができなため、最低の業務をさがすことで満足するであろう。最低の業務もそれ自身の職人たちだけでなく、他のすべての種類からあふれてきた職人たちで供給過剰となっているため、雇用を求める競争ははげしく、労働の賃金を労働者のもっともみじめで乏しい生計の水準まで引き下げられるだろう。多くの人々はこうした厳しい条件でさえ、雇用を見つけることができず、飢えるか、あるいは乞食をするなり極悪非道をおかすなりして、生計を求めることになるだろう。困窮、飢餓、死亡がただちにその階級にひろがり、またそこから上層階級のすべてにまで及び、ついにはその国の住民数は、他のものを破壊してしまった暴政と災難を免れてその国に残存する収入と貯えによって容易に扶養されうる程度にまで、減少するに至ったのである。これがおそらく、ベンガルやその他東インドのいくつかのイングランド植民地の現状に近いものであろう。以前に人口が大幅に減少し、したがって生計があまり困難でないはずなのに、それにもかかわらず三〇万も四〇万もの人びとが一年に餓死する肥沃な国では、労働貧民の維持にあてがわれる原資は急速に減少しつつあるものとわれわれは確信していいだろう。」WN, I, pp. 90-91. 『国富論』1、132-3 ページ。

スミスは神の見えざる手という言葉を頻繁に用いたわけではない。社会と歴史はそれなりに合理的なメカニズム、発展の論理を備えているというのがスミスの分析である。それはほとんどの人間が自らの境遇を改善したいと考えて行動するから、時々の結果が最善でなくても、よりよく生きようとする努力が繰り返され、成功するにはどうすればよいかも考えるからである。したがって、社会は個人の利己心の追及が社会の繁栄を生み出すようにできているし、交換＝分業の拡大として展開する歴史は、未開状態の貧困から商業社会の富裕への発展の歴史となる。人間には完全な叡智はないかもしれないが、知性は力となってより自由で豊かな社会を生み出すことにつながる。社会把握としてスミスは無益テーゼ（ニヒリズム）も危険テーゼ（臆病）も退けている。逆転テーゼ（意図せざる結果）は援用しているが、それは社会の実質的に合理的なメカニズムにあてはめられているのである。封建諸侯が奢侈に溺れて没落したことで下層階級が解放された。労働者、資本家、地主が、それぞれ利己心に導かれて自らの利益を最大にしようとして行動しようとも、市場と競争に媒介されて、賃金も利潤も地代も平均化される。すなわちそれぞれの階級が共存できるメカニズムが働き、富裕が社会全体に行き渡るといっているのである。労働者が働く意欲をなくしたとき、社会は衰退する。商工業者も意欲をなくせば、社会は衰退する。地主はどうか。土地を利用するものがいなくなれば、地代は生まれないであろう。衰退は悪である。諸階級が生きる意欲をなくさないことが重要である。停滞した社会では人々の勤労の意欲が減退している。衰退も国によっては起こる。世界全体は総じて発展してきたとスミスは見ているが、地域や国家の衰亡も繰り返されるのが歴史である。

ヨーロッパの強欲はインドを悲惨な状態にした。

「アメリカの発見と、喜望峰経由での東インド航路の発見とは、人類の歴史に記録された最大かつ最重要な二つの出来事である<sup>40)</sup>。その諸結果は、これ

40) グラスゴウ版の編者が指摘するように、これはレナル『哲学的歴史』*Histoire Philosophique* (1775) の同じ表現の引き写しである。WN, I, p. 626 note. レナルの大作は東インドの篇が邦訳されている。大津真作訳『両インド史 東インド篇 上、下』法政大学出版局、2009年。

まですでに大きかったが、しかしこれらの発見以来の二、三世紀という短い期間では、両者の結果の全範囲を知ることは不可能だった。それらの大事件から今後どのような恩恵または不運が人類にもたらされるのか、人智は予見できない。両者の結果の一般的傾向は、世界のもっとも遠く離れた諸地方がある程度結びつけて、それらの地方が、たがいの不足を補いあい、たがいの享受を増加させあい、たがいの産業を奨励しあうことができるようにすることによって、有益なものと考えられるだろう。しかしながら、東西両インドの原住民にとっては、それらの出来事が生みえたはずのすべての商業的利益は、それらが引き起こしたおそろべき不運のなかに埋もれ、失われてしまった。」<sup>41)</sup>

スミスは、アメリカの発見とインド航路の発見は歴史上の最大の出来事であるが、これまでのところ世界にとって有益であったものの、原住民にとっては不幸であったとしている。ただし「今後どのような恩恵または不運が人類にもたらされるのか」の予測はできないと、最終結論は保留している。我々現代人はその帰結を知りうる立場にあるが、メリットもデメリットもあったとしか言いようがないであろう。

1790年に他界したスミスはその後の世界の歴史を知りうる立場になかった。19世紀はナショナリズムの世紀であった。20世紀は帝国主義の世紀であり、戦争と革命の世紀であった。21世紀はどのような世紀になるのか。いくつかの可能性があるだろう。しかし、人間、とりわけ権力者が悪行を犯す可能性を見ていたとしても、19世紀以降の世界の歴史の展開はスミスの予想を超えていたであろう。またスミスの分業発展史観からしても確たる自信のある予測はできなかった。

しかし、各地域は産業的に発展していくであろうし、自由が世界に広まり、強者の権力欲はなくならないとしても強国の専制的な支配が抑制されることもスミスは可能性としてありうると見ていた。スミスは決して楽観的ではなかつ

---

41) WN, II, p.626. 『国富論』3、234-5 ページ。

たが、モンテスキューやルソーのように、文明が世界的に衰退し、人間がいよいよ墮落していくとは思っていなかった。スミスはこう続けている。

「これらの不運は、それらの出来事自体の本性のなかにある何事かからではなく、むしろ偶然に生じたもののように思われる。これらの発見が行われた特定の時期には、たまたまヨーロッパ人の側の力のほうがはるかにまさっていたため、彼らはそれらの遠隔諸国で、あらゆる種類の不正を行って、処罰されないでいることができた。おそらくこれからはそれらの国の住民はより強力になり、あるいはヨーロッパの住民はより弱くなり、世界のあらゆる地域の住民は、勇気と力において平等になって、そのことが相互の恐怖心をそそり、それだけでも独立諸国の不正を抑制して相互の権利にたいするなんらかの尊敬の念をもたせることができるだろう。しかし、すべての国と国のあいだの広範な商業が自然に、あるいはむしろ必然的にもなう、知識とあらゆる種類の改良の相互交流ほどに、この力の平等を確立するものはなさそうに思われる。」<sup>42)</sup>

21 世紀を迎えて、中国とインドが発展し、次第に西洋と均衡する力をもってきた今、スミスが展望した可能性が実現し始めているのかもしれない。

---

42) WN, II, pp. 626-7. 『国富論』3、235 ページ。